

書名：間違いだらけの学習論

著者：西林克彦

出版社：新曜社

出版年月：1994年5月

総ページ数：195ページ

ISBN：478850488X



推薦者

森康彦

鳴門教育大学大学院准教授
教員養成特別コース

この本に出会ったのは、20年近く前のことである。小学校現場で担任をしながら、教材研究もそれなりにしていたつもりだったが、子ども自身がどう学んでいるかはそれほど考えていなかった。そんな私の目に飛び込んできたこの本のタイトルは結構衝撃的だった。「理解に時間がかかる子どもにどう教えたらいいのだろう」「学習内容のエッセンスを取り出してそこだけ教えたら負担が少なく、覚えやすいかも」という発想に対して、本書は、『学習対象の量は少ないほどやさしいか?』と問いかけ、実証研究を紹介しながら有意義学習の意義をわかりやすく解説していく。例えば学習量の問題では、「眠い男が水差しを持っていた」「太った男が錠を買った」などのある男とその行動を記憶するというプランフォードらの記憶実験を紹介し、「眠い男がコーヒーメーカーに水を入れるために水差しを持っていた」「太った男が冷蔵庫の扉にかける錠を買った」などのように、文は長くなっても有意義化することで記憶しやすくなるということを解説している (P.16-18)。他にも、『経験すれば学習できるか?』(P. 21)、『詰め込むとあふれるか?』(P.38)、『賞罰は学習を進めるか?』(P.67)、『学習すれば知らないことが減るか?』(P.71) など、普段当たり前のこととして考えられ、学校現場で行われていることに対して、「ちょっと待てよ」と問題を投げかけ、認知心理学の知見を援用しながら、学習者の理解の仕方や、教師の役割などについて興味深く論を進めている。

自分自身の学びも含め「学び」について、ちょっと立ち止まって考えてみるのいうってつけの書だと思われる。

西林氏は、その後も『わかるのしくみ』(新曜社,1997)、『親子でみつける「わかる」のしくみ』(共編著,新曜社,1999)、『わかったつもりー読解力がつかない本当の原因ー』(光文社新書,2005) など出版され、「わかる」という奥に潜む落とし穴をのぞき込みながら、より深い理解について読者が考えていけるよう導いておられる。これらの図書についても一読をお勧めしたい。

